

BOOK REVIEW 1

かたちだけの愛

平野 啓一郎 著

中央公論新社 ISBN 978-4120041761 2010年

評者：CHORD××CODE

工学とゆるやかに重なり合う多様な領域の、東京大学ゆかりの女性博士7人から構成される集団。女性的感性(CHORD)と論理的思考(CODE)のハイブリッドなコードを用いて、日々の暮らしに幸せを吹き込むメソッドや技術の開発を行う。

<http://chordxxcode.com>



【はじめに】

今号のBOOK REVIEWは、編集委員会での検討を経てややスタイルを変え、女性研究者ユニットCHORD xx CODEによる合評形式で展開される。歴史ある文芸誌『群像』(講談社)でも合評スタイルの「創作合評」が知られているが、今回の試みについては少し補足が必要であろう。本書は純文学作品であり、著者の平野啓一郎氏は、23歳(当時最年少)での芥川賞受賞以降、重厚な長編歴史作品から先鋭的なメディアテクノロジーをも題材とする実験的な短編作品群へとダイナミックな変貌を見せ、短編期終了後はさらにVRやMR、ARなどのテクノロジーや工学的アプローチを顕著に取り上げてきた。かつて館岡教授による連続講義「VRラボ」にも招かれて東京大学で講演し、「バベルのコンピュータ」や「決壊」ではメディアアートの要素を作中にちりばめ、前作「ドーン」ではより直截的に、火星へ旅する宇宙船を舞台に変容するアイデンティティを「分人主義」、自己イメージの操作システムを「散影」という概念として提示している。主人公の宇宙飛行士の夭折した息子がVRの部屋の中で生き続けるという描写もある。一方で本作は、読売新聞夕刊の連載を改稿刊行し、プロダクトデザイナーの主人公が、片足を失った美しい女優の義足を三次元プリンターで試作するシーンもさることながら、身体の多義性という非常に重要なVRの命題をテーマの一つとしている。すでに作家は「分人主義三部作」を終え、次のステージとして漫画雑誌『モーニング』の小説連載が話題を集めている。いま、「VRと美容」の特集号担当を控えた

CHORD xx CODEの女性研究者たちは、本作をどう読み解くだろうか。

【あらすじ】

新進気鋭のプロダクトデザイナーである相良郁哉はある雨の日に起きた交通事故で「美脚の女王」と言われる女優の叶世久美子を助けるが、彼女は、その美脚である左足を切断する重症を負った。その後、叶世の義足をデザインすることになる相良は叶世を亡くなった自分の母の姿に重ねながら、次第に心がひかれてゆく。義足というかたちを通し、親子、夫婦、恋人など人間関係の間で揺れ動く愛のかたちを問う。

【合評】

絶世の美女は一種の「病」である

C「恋愛小説として読むと一般的かもね。女性が事故で足を失う物語の始まり方とか、売れっ子デザイナーという主人公の属性とか。でも、事故に合う女性が『絶世の美女』という設定なのが気になった。外見が圧倒的に美しいというのはどんな気持ちなのか。」

H「私は絶世の美女は一種の病気だと思う。生まれつきの宿命で、女の人に嫌われて、男の人をもてあそぶという運命が決まっちゃっているよね。」

C「ということは、もてあそびたいとかそういう気持ちもなく、ただ定まっているってということ？」

H「そういう『かたち』なんだと思う。」

O「他人から普通に扱われたりしたこともないし普通が想像できないよね。まして、人から可哀想と思われるような立場はもう自分じゃないと思ってるかも。」

C「だから、最初足を失って死にたいと思っていたけど、すごく美しい義足を作るっていうことになって、足を失って可哀想な人と思われない可能性が出て来たから気持ち切り替えたってことかな？」

H「葛藤はあったけど変えられたってことだよ。その葛藤する辺りはすこし人間っぽいね。」

O「雰囲気とか全体をきれいにするという話はどうか？」

H「例えば、事故で顔面骨折にあってしまった人というのが主人公の女性だったとして..」

O「顔面骨折の人が、前の自分以上にきれいになるという話はどうか？」

H「プロダクトデザイナーの男性が顔を造り直すっていう話だね。」

R「でも、顔面骨折みたいに、顔そのものの基礎がなくなるのと足の機能がなくなるのは違いそう」

D「そうだね。この小説では、義足でファッションショーに出てランウェイを歩くという試練を乗り越えるのが、機能面でも障害を乗り越えたということを示している。」

O「足は機能がシンプルだからわかりやすいストーリー

ができるよね。顔は機能を追求するのと美しさを追求するのと大きく違いそうだし。」

C「機能と美についての対比は、この小説でも語られてたよね。道路を歩いている女の子の足を見て、健脚が美脚とは限らないって。この辺りの機能と美との間の表現は、まさにプロダクトデザイナーの領域なんだろう。」

自分の足を切っても..

C「小説の中に出て来た病院の経営者の女性が、健康な足を持った人が自分の足を切ってもつけなくなる義足をつくらうと主人公に言っていたけど、そういう行為はあり得るかな？」

D「小説でも紹介されていたエイミー・マリノズの講演をネットで見たら、義足をつけることで、身長が伸び縮みするのを友達が羨ましがって卑怯だと言ったという話があったけど、それって、自分の足を切ってもということにつながるよね。」

C「女子って、メイクもするし、整形技術とかも積極的に取り入れて、自分改造を熱心にする傾向が男子よりもあるから、極論言っちゃおうと、自分の足を切って、きれいな足にしようとか、自分の耳を切ってきれいな耳つけようとか、人工的に造りかえるというのはありかなと思ったんだけど。」

H「整形もすでにその一種だよな。」

O「それって、豊胸手術とかと同じように、ちょっと切ってきれいな足にしようと病院に行っちゃってことだよな。」

R「ちょっと弱々しく見えるようにつけかえてもらったり..」

H「そう考えると、義足って男子の好みかもね。」

C「私もそう思う。なんかエロいしね。」

E「この小説には、義足の技術が最初は失った身体の一部を補うための技術だったけど、どんどん進化していったって、形や機能がどんどん優れてくると、失った機能を補うだけではなくてくるというメッセージがあるよね。」

D「そうなると、技術の進歩で、みんな美しい義足をつけるようになる気がしてきた。」

女性のための Augmented Human テクノロジー

D「義足がモテるかもという話から、メガネっ娘が頭をよぎったんだけど。」

H「うん。メガネっ娘も近いかも」

O「メガネつけていない時には俺が周りを注意してあげないとみたくない感じ」

R「なるほど。やっぱり男の人は守ってあげたい女の子が好きだから不完全な女子がいいんだ。じゃあ、社会

性を最低限守りつつ、何か不足していることで、男の人に想像力をかきたてるような VR 技術が必要だね。」

C「そうだね。完璧に全てを用意するんじゃなくて、男の人の視線に触れるようなところはわざと欠けさせる技術」

R「つまり、Augment しない VR 技術ってことだよな。」

R「男の人の場合は、これまでの強さを求める Augmented Human の考え方でいいけど、Augmented Human された女子がはたしてモテるのか、というのが常々疑問だったんだよね。」

C「そう。モテるのは重要。完璧ではない方が男性から好まれる傾向があるという仮説からすると、女性の Augmented Human は今までのものとは逆だよな。」

O「減少？」

R「そうそう。減少。強くならない。所作が美しいっていうのも、ぱぱっと動くんじゃなくて、ゆったりとした動作が美しいって言われるよね。それって機能からすると減少だし。」

E「そうするとやっぱりモテるためには何か減らした方がいいかな。絶世の美女になるのは無理だから、機能を減らしてモテるようになるしかないよね。」

C「機能を減らして、かつ、人工物っていうのがいいかも。それが女性がモテるための技術かもね。」

O「義足も機能追求しちゃったらモテるための技術にはならないってことだよな。」

R「この小説の義足も美しいけど、早くは走れないんだよな。」

H「うん。不完全だから守ってというデザインを主人公の女優はしてるよね。この人は減少に成功した人なんだよ。」

R「なるほど。なんか、はじめこの小説を読んだ時、エピソードとかとってつけたような感じに思えて全然共感できなかったんだけど、いまみんなとしゃべっていたら、この小説は男性のある種の願望を素直に表した小説で、女性のための Augmented Human テクノロジーのヒントがあるかもしれないことがわかったかも！」

E「じゃあ、疑似的な弱さを演出するテクノロジーを現実させてみたらどうかな？」

C「そうだね。昔から、纏足(てんそく)とか、コルセットとか、女性を美しく弱く見せるために身体の機能をかなり暴力的に減少させる方法があったけど、むしろそれを逆手にとって、テクノロジーの支援で、引き算でこちらに惹きつけるような、無理のない方法で機能を減少させるか減少しているように見える Augmented Human を私たち自身の手で実現させたいね。」

(2011年10月11日東京大学工学部2号館にて)

